

## 太陽の昇るところで使用される税金

北九州市立守恒中学校 3年 平島 思実

私は、小学5年生から中学入学前までの約1年半、東ティモールで過ごしました。この国は岩手県くらいの広さがあり、西にはインドネシアのバリ島、南にはオーストラリアのダーウィンが位置しています。人口は約130万人。大航海時代にポルトガルの植民地になり、1975年にインドネシアに侵略された長く暗い歴史を持っています。2002年に国連の支援によりインドネシアから独立しました。現在、政治は安定していますが、未だアジア最貧国のひとつに数えられる途上国です。

私が住んでいたアパートの近くには、ディリ港がありました。フェリーの出入港前後は、人と荷物を載せた車で通りは大混雑していました。小さな首都のディリから郊外に出ると殆どの道路は未整備のため、フェリーは地方へ移動するための重要な交通手段です。

ある時、港の近くで「飛鳥建設」と書かれた旗を見つけました。その横には、東ティモールと日本の国旗が描かれた看板があり、とても驚きました。車からはよく見えなかったのですが、人通りが少ない時間にもう一度行って読み返すと、日本の建設会社が「ディリ港フェリー・ターミナル移設計画」の工事を行っていると書かれていました。父に聞くと、日本政府の開発援助（無償資金協力事業）で、乗客専用のフェリー・ターミナルを作っている途中であること、ディリ港は世界でも稀な「人と貨物が混在する」危険な港であること、完成すると東ティモールの人々の安全が守られることを聞きました。その時まで私は税金が途上国の人々の生活に役立っていると考えたことがありませんでした。

無償資金協力は、途上国の中でも所得水準の低い国の経済や生活水準を向上させるために未整備の道路や橋などを建設する他、水の供給施設や学校・病院などを整備するために資金を供与しています。

この港の整備工場の他、空港近くのコモロ川に新しい橋を架ける工事も無償資金協力によって行われていました。この橋は私が東ティモールに住んでいる時に完成し、竣工式には日本の外務大臣が出席されました。実際に行ってみると、日本の橋がそのまま東ティモールに出現していました。雨季に川が増水しても安全に通行できるように設計されていると聞き、日本の技術力に感心しました。

「東ティモール」の国名は、現地語で「太陽の昇るところ」という意味です。これに由来し、橋は「日の出橋」と命名されました。東ティモールと日本の絆が長く続けばいいなと思っています。

税金が途上国の経済発展のために使われ、その一部が東ティモールの人々の生活を支え、役立っているところを私は実際に見ることができました。国内だけでなく、国際社会を豊かにするために途上国を中心に税金が使われていることを多くの人に知って欲しいと考えました。